2016. 3. 28　No.2193　No.29

三条南ロータリークラブ週報
Sanjo Minami Rotary Club

会長挨拶

三条南ロータリークラブ会長
星野　健司

皆様こんにちは。
本日の卓話をして下さる広岡豊樹さんご苦労様です。後程、よろしくお願いいたします。

さて本日は、ご存知の方もおいででしょうが、三条市出身の若手小説家・経済ジャーナリストの相場英雄さんをご紹介いたします。
相場英雄さんは 1967 年生まれの 48 歳で、新潟県立三条高等学校を経て外国語専門学校卒業後、キーパンチャーとして 1989 年に時事通信社に入社されます。当初は市場データの編集業務を担当していましたが、その後経済部記者として日本銀行や東京証券取引所などを担当しましたが、大卒ではないという理由で大蔵省担当にはなれなかったそうです。
2005、『デフォルト 債務不履行』で第２回ダイヤモンド経済小説大賞を受賞し小説家としてデビューされます。2006 年、時事通信社を退社し作家専業となり、年１冊のペースで本を出されます。BSE 問題を扱った 2012 年の『震える牛』が累計 28 万部のベストセラーになり、2013 年、『血の轍』が第 26 回山本周五郎賞候補作、第 16 回大藪春彦賞候補作となります。只今ご紹介した『震える牛』『血の轍』はテレビの WOWOW で連続ドラマ化され、BS ジャパンでは『みちのく麺食い記者 宮沢賢一郎シリーズ』が放映されています。また漫画原作や脚注などでも活躍され、新潟日報の朝刊に 2014 年 7 月から 2015 年にかけて連載された『御用船帰還せず』を読まれた方も多いのではないでしょうか。
1/29 の BS イレブン『宮崎美子のすずらん本屋堂』の放送 200 回記念のゲストで相場英雄さんが出演され、大企業と派遣社員の実態を描いた最新刊の『ガラパゴス』という本を紹介され、今後かなり期待される小説家だそうですので、皆様も機会がありましたら相場英雄さんの著書を是非お読み下さい。

出席率	会員52名中36名
先々週の出席率	82.98%（3/7）
ヴィジター	大林培男会員後任　桑原朋子さん
先週のメークアップ	3/15 次年度市内４ＲＣ会長幹事会へ　丸山征夫君　谷　晴夫君 3/24 加茂ＲＣへ　松﨑孝史君

四つのテスト
―言行はこれに照らしてから―
Ⅰ真実かどうか
Ⅱみんなに公平か
Ⅲ好意と友情を深めるか
Ⅳみんなのためになるか　どうか

Be a gift to the world
世界への
プレゼントになろう
―2015-16 年度国際ロータリーのテーマ―

国際ロータリー会長	K. R. ラビンドラン［ｽﾘﾗﾝｶ］
第2560地区ガバナー	山本和則［新潟南］
第4分区ガバナー補佐	鳥部文雄［燕］
会長	星野健司
幹事	齋藤嘉一
ＳＡＡ	銅冶康之

事務局
〒955-8666三条市旭町2-5-10
三条信用金庫 本店内
TEL 0256-35-3477　FAX 0256-32-7095
E-mail　info@sanjo-minami.jp
URL　http://www.sanjo-minami.jp

幹事報告

齋　藤　嘉　一　幹事

吉田ロータリークラブより　事務局移転のお知らせ

2016 年 3 月 22 日より

❍ 新事務所　〒959−0251　燕市吉田本所 83−1　TEL＆FAX　0256−77−6600

❍ 例会会場　燕市吉田産業会館は変更ございません

なお、例会変更による記帳受付につきましては、吉田産業会館 窓口 となります。

お元気で！

転勤にともなう退会の挨拶　　大林 培男 会員

この度、営業店舗統合に伴い、さいたま市の本社に転勤となりました。

昨年 1 月の新年会より出席、とても温かく迎えていただきましたことを覚えております。1 年 2 ヶ月の短い期間でしたが、大変お世話になりました。皆様と親しくお付き合いさせていただき貴重な経験を積むことが出来ましたこと深く感謝申し上げます。

後任の桑原は新潟営業所勤務になりますが、県央地域を担当、今まで同様にお気軽にお申し付け下さい。また、私同様、ご指導の程よろしくお願いいたします。

三条南クラブの益々のご発展をお祈り申し上げます。

ニコニコボックス NIKO-NIKO BOX

～ 3 月 14 日　20,000 円
今年度累計　458,570 円 ～

大　林　君　短い期間でしたがお世話になりました。後任の桑原をよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

星　野　君　本日卓話の広岡さん、ご苦労様です。楽しみにしています。JTBの桑原さん、ようこそ。ごゆっくりお過ごしください。

齋　藤　君　広岡さん、卓話よろしくお願いします。

馬　場　君　大林会員、大変お世話になりました。新しく桑原朋子会員を迎えました。ご歓迎申し上げます。

丸 山（征）君　一昨日の土曜日、遊びの先輩に連れられ、新潟古町芸者さん達と夕食をしてきました。やっぱりお金がかかるなあ～。

広　岡　君　今日は卓話当番です。早く終って開放されたいなあ！

銅　冶　君　広岡豊樹会員、本日の卓話よろしくお願いします。

坪　井　君　めっきり春らしくなってきました。気持ちがウキウキします。広岡さんの卓話、期待しています。

坂井君、鈴木(武)君、田代君、野中君　広岡さん、卓話ご苦労様です。楽しみにしています。

佐々木君、佐藤(嘉)君、野崎君、渡辺(俊)君、渡邊(光)君　BOXに協力いたします。

荒　澤　君　本日はご協力ありがとうございました。

卓話

「逝きし世の面影」　　広岡　豊樹 会員

今日は、一冊の本を紹介させていただきます。「逝きし世の面影」という題名で、前々回の卓話で一度取り上げましたが、内容が豊富なことと、わたし私身の思い入れも深いことで、今回もう一度、取り上げることにしました。

2005 年 9 月 9 日に、初版第一刷、同 9 月 29 日に第二刷が出版され、私の手元にあるものは、その第二刷です。その後、2015 年 6 月 22 日の時点で、その第三十二刷となっていて、その時の帯に、「13 万部、これはもう現代日本人必読の名著である」とあります。

出版されて以来、何人かの著者に言及されているのを見ましたが、2015 年に出版された櫻井よしこ氏の「日本人に生まれて良かった」という著書でも大きく取り上げられています。うまくまとめて紹介されていますので読んでみます。

外国人を感嘆させた日本人の美しい姿

災害や戦乱もありましたが、おしなべていえば、日本人は歴史を通して同時代の諸外国では想像もできないほど、明るく、幸せに暮らしてきた民族といえるのではないでしょうか。幕末から明治時代のはじめにかけて日本を訪れた外国人たちはみな、日本の美しい風景と清潔さに感動し、人々の幸福そうな暮らしぶりと、日本人の誠実でやさしい人柄に驚嘆しました。

渡辺京二氏の『逝きし世の面影』(平凡社) には、幕末から明治にかけて日本を訪れた、諸外国人の人たちの言葉が集められています。私は、渡辺氏のこの本こそ、日本のすべての家庭に一冊ずつ置いてほしいと思っています。そして、母と子、父と子、あるいは祖父母と孫などの組み合わせで、ともに読んでほしいと願っています。

そこには、現実の人間世界では奇跡としか思えないような日本人の良さを、ごく普通の当然のこととして実践している日本人の姿が、外国の人々の文章でつづられています。ごく一部をひいてみましょう。

この後、十数頁に渡って、本文からの引用がなされていますが、その最初の引用が、わたしが前回の卓話の最後に引用したものと同じものになっています。

英国の詩人エドウィン・アーノルドが、1889（明治 22）年に来日したとき、歓迎晩餐会で行なったスピーチです。アーノルドは、日本を

「地上で天国（パラダイス）あるいは極楽（ロータスランド）にもっとも近づいている国だ」と賞讃し、「その景色は妖精のように優美で、その美術は絶妙であり、その神のようにやさしい性質はさらに美しく、その魅力的な態度、その礼儀正しさは、謙譲ではあるが卑屈に堕することなく、精巧であるが飾ることもない。これこそ日本を、人生を生甲斐あらしめるほとんどすべてのことにおいて、あらゆる他国より一段と高い地位に置くものである」

と述べました。

これは尋常な言葉ではありません。今日最後に紹介する、イザベラ・バードの言葉とこのアーノルドの言葉は、一度聞いたら忘れられないものになります。

さて、「逝きし世の面影」は十四章から成っています。各々の章名も、情緒豊かなので読み上げてみます。

第一章　ある文明の幻影
第二章　陽気な人びと
第三章　簡素とゆたかさ
第四章　親和と礼節
第五章　雑多と充溢
第六章　労働と身体
第七章　自由と身分
第八章　裸体と性
第九章　女の位相
第十章　子どもの楽園
第十一章　風景とコスモス
第十二章　生類とコスモス
第十三章　信仰と祭
第十四章　心の垣根

となっています。

第一章の冒頭の部分を紹介します。

私はいま、日本近代を主人公とする長い物語の発端に立っている。物語はまず、ひとつの文明の滅亡から始まる。

日本近代が古い日本の制度や文物のいわば蛮勇を振った清算の上に建設されたことは、あらためて注意するまでもない陳腐な常識であるだろう。だがその清算がひとつのユニークな文明の滅亡を意味したことは、その様々な含意もあわせて十分に自覚されているとはいえない。十分どころか、われわれはまだ、近代以前の文明はただ変貌しただけで、おなじ日本という文明が時代の装いを替えて今日も続いていると信じているのではなかろうか。つまりすべては、日本文化という持続する実体の変容の過程にすぎないと、おめでたくも錯覚して来たのではあるまいか。

実は、一回かぎりの有機的な個性としての文明が滅んだのだった。それは江戸文明とか徳川文明とか俗称されるもので、十八世紀初頭に確立し、十九世紀を通じて存続した古い日本の生活様式である。明治期の高名なジャパノロジスト、チェンバレン（Basil Hall Chamberlain 1850〜1935）に「あのころ―　一七五〇年から一八五〇年ごろ―の社会はなんと風変りな、絵のような社会であったことか」と嘆声を発せしめた特異な文明である。文化は滅びないし、ある民族の特性も滅びはしない。それはただ変容するだけだ。滅びるのは文明である。つまり歴史的個性としての生活総体のありようである。ある特定のコスモロジーと価値観によって支えられ、独自の社会構造と習慣と生活様式を具現化し、それらのありかたが自然や生きものとの関係にも及ぶような、そして食器から装身具・玩具にいたる特有の器具類に反映されるような、そういう生活総体を文明と呼ぶならば、十八世紀初頭から十九世紀にかけて存続したわれわれの祖先の生活は、たしかに文明の名に値した。

それはいつ死滅したのか。むろんそれは年代を確定できるような問題ではないし、またする必要もない。しかし、その余映は昭和前期においてさえまだかすかに認められたにせよ、明治末期にその滅亡がほぼ確認されていたことは確実である。そして、それを教えてくれるのは実は異邦人観察者の著述なのである。日本近代が経験したドラマをどのように叙述するにせよ、それがひとつの文明の扼殺と葬送の上にしか始まらなかったドラマだということは銘記されるべきである。扼殺と葬送が必然であり、進歩でさえあったことを、万人とともに認めてもいい。だが、いったい何が滅びたのか、いや滅ぼされたのかということを不問に付しておいては、ドラマの意味はもとより、その実質さえも問うことができない。

日本近代が前代の文明の滅亡の上にうち立てられたのだという事実を鋭く自覚していたのは、むしろ同時代の異邦人たちである。チェンバレンは一八七三（明治六）年に来日し、一九一一（明治四十四）年に最終的に日本を去った人だが、一九〇五年に書いた『日本事物誌』第五版のための「序論」の中で、次のように述べている。「著者は繰り返し言いたい。古い日本は死んで去ってしまった、そしてその代りに若い日本の世の中になったと」。これはたんに、時代は移ったとか、日本は変ったとかいう意味ではない。彼はひとつの文明が死んだと言っているのだ。だからこそ彼は自著『日本事物誌』のことを、古き日本の「墓碑銘」と呼んだのである。「古い日本は死んだのである。亡骸を処理する作法はただ一つ、それを埋葬することである。……このささやかなる本は、いわば、その墓碑銘たらんとするもので、亡くなった人の多くの非凡な美徳のみならず、また彼の弱点をも記録するものである」。

古い日本が滅びたというとき、失われたものは具体的には何だったのでしょうか。個々の制度や文物や景観ではない、日本的事物に関しては、滅びたものより残っているものの方が多い、また、国民性と言われるような民族的特質でもない。東北大震災の時の日本人の姿に、世界の人々は驚嘆しました。
決定的な一語が、語り出されます。その部分を紹介します。

だから問題は日本人の民族的特性にあるのではない。その特性がある観察者によっては口を極めて賞賛され、また別な観察者からは辛辣に罵倒されるにせよ、残念なことにその特性は当分滅びようがないのである。だからそれならばなぜチェンバレンは、「捨てた過去よりも残している過去の方が大きい」と言いながら、一方では「古い日本は死んだのである」と断言し、その屍の上に『日本事物誌』という墓碑を建立しようとしたのだろうか。彼は、ある民族の特性とある文明の心性とは、一見わかちがたく絡みあっているにせよ、本来は別ものであることを承知していたのだ。死んだのは文明であり、それが培った心性である。民族の特性は新たな文明の装いをつけて性懲りもなく再現するが、いったん死に絶えた心性はふたたび戻っては来ない。たとえば昔の日本人の表情を飾ったあのほほえみは、それを生んだ古い心性とともに、永久に消え去ったのである。

文明が培った心性、心の性（さが）
滅んだものは、それでした。
それは、江戸文明のあらゆるところに表われていて、その根底に在ったものです。外国人観察者は、それに打たれ、ぼう大な証言を残したのでした。本書の主要部分である第二章以下の章で、証言に基づいて、滅びた心性の実相が明らかにされます。著者は、滅びたものが何だったかを私達に徹底的に知って欲しいのです。それを失ったことの意味を著者と供にかみしめて欲しいのです。

時間が来るまで、第二章「陽気な人々」から、外国人の証言を紹介します。

十九世紀中葉、日本の地を初めて踏んだ欧米人が最初に抱いたのは、他の点はどうあろうと、この国民はたしかに満足しており幸福であるという印象だった。ときには辛辣に日本を批判したオールコックされ、「日本人はいろいろな欠点をもっているとはいえ、幸福で気さくな、不満のない国民であるように思われる」と書いている。ペリーは第二回遠征のさい下田に立ち寄り「人びとは幸福で満足そう」だと感じた。ペリーの四年後に下田を訪れたオズボーンには、町を壊滅させた大津波のあとにもかかわらず、再建された下田の住民の「誰もがいかなる人びとがそうありうるよりも、幸せで煩いから開放されているように見えた」。

一八七六（明治九）年来日し、工部大学校の教師をつとめた英国人ディクソン（William Gray Dixon 1854～1928)は、東京の街頭風景を描写したあとで次のように述べる。「ひとつの事実がたちどころに明白になる。つまり上機嫌な様子がゆきわたっているのだ。群衆のあいだでこれほど目につくことはない。彼らは明らかに世の中の苦労をあまり気にしていないのだ。彼らは生活のきびしい現実に対して、ヨーロッパ人ほど敏感ではないらしい。西洋の都会の群衆によく見かける心労にひしがれた顔つきなど全く見られない。頭をまるめた老婆からきゃっきゃっと笑っている赤児にいたるまで、彼ら群衆はにこやかに満ち足りている。彼ら老若男女を見ていると、世の中には悲哀など存在しないかに思われてくる」。むろん日本人の生活に悲しみや惨めさが存在しないはずはない。「それでも、人びとの愛想のいい物腰ほど、外国人の心を打ち魅了するものはないという事実は残るのである」。

リンダウも長崎近郊の農村での経験をこう述べている。私は「いつも農夫達の素晴らしい歓迎を受けたことを決して忘れないであろう。火を求めて農家の玄関先に立ち寄ると、直ちに男の子か女の子があわてて火鉢を持って来てくれるのであった。私が家の中に入るやいなや、父親は私に腰掛けるように勧め、母親は丁寧に挨拶をしてお茶を出してくれる。……最も大胆な者は私の服の生地を手で触り、ちっちゃな女の子がたまたま私の髪の毛に触って、笑いながら同時に恥ずかしそうに、逃げ出していくこともあった。幾つかの金属製のボタンを与えると……『大変有り難う』と、皆揃って何度も繰り返してお礼を言う。そして跪いて、可愛い頭を下げて優しく微笑むのであったが、社会の下の階層の中でそんな態度に出会って、全く驚いた次第である。私が遠ざかって行くと、道のはずれ迄見送ってくれて、殆んど見えなくなってもまだ、『さよなら、またみょうにち』と私に叫んでいる、あの友情の籠もった声が聞こえるのであった」。

スイスの遣日使節団長として一八六三（文久三）年に来日したアンベール（Aime Humbert 1819～1900）は、当時の横浜の「海岸の住民」について、こう書いている。「みんな善良な人たちで、私に出会うと親愛の情をこめたあいさつをし、子供たちは真珠色の貝を持ってきてくれ、女たちは、籠の中に山のように入れてある海の無気味な小さい怪物を、どう料理したらよいか説明するのに一生懸命になる。根が親切と真心は、日本の社会の下層階級全体の特徴である」。彼が農村を歩き回っていると、人びとは農家に招き入れて、庭の一番美しい花を切りとって持たせてくれ、しかも絶対に代金を受けとろうとしないのだった。

イザベラ・バード、
彼女は「人力車夫が私に対してもおたがいに対しても、親切で礼儀正しいのは、私にとって不断のよろこびの泉だった」と書いている。彼女は東北・北海道の旅を終えてこんどは関西へ向かったが、奈良県の三輪で、三人の車夫から自分たちを伊勢への旅に傭ってほしいと頼まれた。推薦状ももってないし、人柄もわからないので断ると、一番としかさの男が言った。「私たちもお伊勢詣りをしたいのです」。この言葉にほだされて、体の弱そうな一人をのぞいて傭おうと言うと、この男は家族が多い上に貧乏だ、自分たちが彼の分まで頑張るからと懇願されて、とうとう三人とも傭うことになった。ところが「この忠実な連中は、その疲れを知らぬ善良な性質と、ごまかしのない正直さと、親切で愉快な振る舞いによって、私たちの旅の慰さめとなったのである」。伊勢旅行を終えて彼らと大津で別れるときが来た。彼らの頭である「背の高い醜い男」について彼女は書いている。「この忠実な男と別れねばならぬのがどんなに残念か、彼のいそいそとした奉仕、おそろしく醜い顔、毛布を巻きつけた恰好がもう見られなくてどんなにさびしいか、言いあらわせないほどだ。いやちがう。彼は醜くはない。礼儀と親切に輝く顔が醜いということはありえない。私は彼の顔を見たいし、またイエスが幼な児について、『天国にあるはかくのごとし』と語られたように、ある日彼について語られることがあるようにと希むものだ」。

この後、500 頁以上に渡ってこのような証言が紹介されています。興味深い内容になっていますので、皆様にも是非読んでいただきたいと思います。

誕生日　4月のお祝い

◆ 会員誕生

11日	野水孝男君		27日	渡辺和宏君

◆ 夫人誕生

8日	野崎裕子（正明）さん		14日	渡邉ノブ子（久晃）さん
17日	石山瑞恵（昌宏）さん			

◆ 結婚記念

5日	坂本洋司君・満寿子さん		8日	加藤峰孝君・さとみさん
9日	鈴木圀彦君・朝子さん		10日	渡邉久晃君・ノブ子さん
12日	永井篤利君・由紀子さん		25日	永桶俊一君・京子さん
26日	野島廣一郎君・優子さん		29日	松﨑孝史君・恵さん

＊おめでとうございます＊

我等の生業

吉井　正孝

（昭和19年　9月17日生まれ）

1990年　5月入会

職業分類	電気工事材料卸販売
事業所名	富士電材 株式会社
事業所住所	三条市荒町 2-2-22
事業所TEL	0256－32－6141
事業所FAX	0256－35－7090
事業所e-mail	fujiden@niks.or.jp
HP URL	http://www.fuji-denzai.co.jp/

富士電材 株式会社

電設資材から家電・オール電化製品まで、富士電材(株)は
皆様の暮らしを明るく照らし続けたいと願っています

事業内容：電設資材、電気用品の卸売業

会津支店 ： 〒965-0022　福島県会津若松市滝沢町 7－46
☎ 0242-24-8266　　FAX　0242-24-7951

富士電材株式会社